

神奈川県海岸美化財団によると神奈川県約150キロに及ぶ長い海岸線の中、海藻の打ち上げの74%は鎌倉に打ち上がる（鎌倉の海の地形と海流の影響）と言う。鎌倉の由比ヶ浜・材木座海岸は中央を流れる滑川から流れ出た、昔からの暮らしで使われていた陶磁器のかけらなど（堆積物・海底ゴミ）が多く打ち上がり、鎌倉の遠浅の湾内に豊富に堆積して、外洋へ流れ出していない特性がある。これは由比ヶ浜、材木座の沖合に水深3～5mほどの遠浅な海底が続いていることによるものだ。遠浅の内湾には、鎌倉時代から昭和までの多くの堆積物が眠っている。

古都の海であり、和賀江嶋（築港）は海のシルクロードとして中国・宋などから輸入高級陶磁器が鎌倉幕府に献上されていた。今でも青磁などのかけらが多く打ち上がり、さらに、馬・牛の歯など動物の骨などが打ち上がり、鎌倉の海辺は日本一、ビーチコーミングに適した海辺と言われている。

鎌倉の海辺には、一旦流れ出た人工物などが、何十年もの年月を経て、再度打ち上がるものがあり、昔、流れ出たガラスビンの内側にバイオフィルムができて、美しくきらめく「銀化ビン」が拾えることでも有名になっている。また、軽くて、錆びないと言われている飲料容器のアルミ缶が砂浜に擦られて、鎌倉の海辺では、プリントが残っていても容易に錆び（電蝕）てしまう様子も分かってきた。また、不要になった漁具のロープは、浅い海底で、波に揺られ、水の動きでロープがほどけ、素線レベルにまでなって生き物を苦しめていることも分かってきた。

砂浜で紫外線を浴びたプラスチックは劣化してバラバラになり「マイクロプラスチック」になっている。こうした「海ごみ」「アルミ缶の腐食」などの現状を浜辺で見て、考えることも、鎌倉のビーチコーミングの大切な課題になっている。

鎌倉の海辺には、一旦流れ出た人工物などが、何十年もの年月を経て、再度打ち上がるのが特質であり、海底に埋まった堆積物を発掘しているのは、打ち寄せる波の力だ。外洋から入ってくる3～5mの大きな波は、専門家の言葉を借りれば、「沖で発生した波は、岸に近づくとき水深が小さくなるので、海底面からの摩擦によりエネルギーが逸散し波の形を維持しきれず砕けはじめる。水の粒子の運動は、波による楕円を描き、浅いところほど海底面に及ぼす波の与える影響は大きい」と言う。

鎌倉の由比ヶ浜、材木座の遠浅のほどよい深さと地形が、大きな波の水の動きを海底に伝え、海底を掘り返している。この掘り返しで、埋まっていた、青磁、ガラスビン、イルカの骨、馬の歯などが海底の表面に出て、沖から2～3日かけて、極一部が砂浜に打ち上がっている。